

マルサス人口論はいかに受容されたか

—「マルサス生誕 150 年記念講演会」(1916 年)に着目して—

How was the Malthusian Population Theory Accepted in Japan? : Focusing on the
'Malthus 150th Anniversary Commemorative Lecture' (1916)

吉野浩司(鎮西学院大学)

Koji YOSHINO (Nagasaki Wesleyan University)

1. 発表の目的

本報告の目的は、京都で開催された「マルサス生誕 150 年記念講演会および図書展示会」に関する記録の検討を通じて、T.R.マルサスおよび彼が始めた人口学的研究は、日本にどのように導入され、どのようにして定着していったのかを再考してみることにある。具体的には、1916(大正 5)年、『経済論叢』「まるさす生誕百五十年記念号」(第 2 巻第 5 号)に掲載された講演記録を検討の素材とする。

2. 背景

1916(大正 5)年 2 月 13 日曜日、京都帝国大学法科大学で、「マルサス生誕 150 年記念講演会および図書展示会」が開催された。午前 9 時より図書展示が大学構内本部階上においてなされ、マルサスの著作および書簡、翻訳書、マルサスに関する伝記、論考、さらには新マルサス主義および人口問題に関する資料などが、ところせましと陳列された。陳列品の中には、東京帝国大学、慶應義塾、長崎高等商業学校の図書館の蔵書から貸し出されたものもあった。内閣統計局からも、各種人口統計のほか、「衛生統計に関する描書図並統計表」など、当時としては貴重な資料も出展されていた。

午後は記念講演会が予定されていた。法科大学第四教室において、1時から6時までの、長時間にわたる記念講演は、田島錦治の司会進行のもとで、執り行われた。開会の辞にかえて戸田海市が「学問としての人口論」について報告する予定であったが、病欠のため、跡部定次郎が代わりに開会の辞を述べた。演目としては、内田銀蔵、河上肇、福田徳三、石川日出鶴丸、瀧本誠一、米田庄太郎、神戸正雄、小川郷太郎、財部静雄、高田保馬らの講演がならんでいた。700 名収容の会場にはその倍近くの来場客が訪れ、立ち見すらままならないほどの人でうめつくされた。

すでに予定を超過した午後 7 時をまわって壇上に立った小川郷太郎は、冒頭「此上諸君ヲシテ飢ヲ忍ハシメ、マ氏人口論ノ、実験ヲ煩スニ堪エス」と述べ、報告を辞し、散会となった。報告のかわななかった小川以下三名の発表原稿は、後日、論文の形で発表された。

本講演会は、活況を呈したのみならず、学術的な意義も大きかったといえるだろう。のちに大淵寛は、この講演会について触れて、大島貞益が人口論の翻訳『人口論要略』を出版した 1877(明治 10)年以来の、「マルサス研究史上二つめの大きな節」と評した(大淵 1966:247)。

3. 検討する資料

以下では、この京都大学の雑誌『経済論叢』の特集論文に依拠して、この講演の内容を振り返っておきたい。さしあたり論説のみを整理してみると、取り上げられているテーマは、大きく3つに分類することができる。第一にマルサスおよびマルサス人口論に関する論考としては、内田銀藏「まるさす先生略傳」、河上肇「まるさす人口論要領」、財部静治「まるさす人口論ノ研究方法ニ就イテ」、福田徳三「まるさす人口論出版當時ノ反對論者特ニ生存權論者」がある。第二に、新マルサス主義を含む、マルサス以降の人口論については、米田庄太郎「まるさす以後ノ人口論」、神戸正雄「新まるさす主義」、戸田海市「人口論ノ學問上ノ性質」などがある。さらに第三に、人口をめぐる諸問題を多角的に論じたものとしては、石川日出鶴丸「馬ト人ノ人工受胎術ヲ論ジテ「人口論」ニ及ブ」、瀧本誠一「支那及日本ノ人口論」、本庄榮治郎「徳川時代ノ人口」、高田保馬「社會階級別ト出生率トノ關係」、小川郷太郎「歐洲戦後ノ人口」があった。

テーマはこのように多様な上に、論者も京都帝国大学の関係者を中心に、各々の専門分野からマルサスおよび人口問題を取り上げている。学外の論者としては、当時、慶應義塾教授であった福田徳三、同志社大学教授であった瀧本誠一が、それぞれの立場から論考を寄せている。

3. 結論

この講演会が、日本へのマルサスの人口論受容において持つ意義は、下記の点にあったといえるだろう。

1. 精緻な経済学史的研究。『人口論』の発表当時の状況や、論争、あるいは各版の違いなどを細かく読み解いた、経済学史的な意義があった。

2. 当時の最新の統計、情報、研究動向の把握。新マルサス主義、あるいは1910年代当時の、世界の人口変動の動向について、敏感に反応したこと。経済発展にともなう人口減少、農村から都市への人口集中などが注目された。日本は世界に比して、高い出生率を保持していた。その現状に、どう対処するかが争点となった。

3. 当時の最先端技術の紹介。動物の人工授精の方法を、人間において応用する可能性について触れられていたこと。産児制限の可否とは別問題として、技術としての必要性和可能性が先駆的に論じられたことは、評価してよいことである。

4. この講演会の成功により、その後も折あるごとに、マルサス記念講演が開催し続けられたこと。

(参考文献)

京都帝國大學法科大学編 1916「まるさす生誕百五十年記念号」『経済論叢』第2巻第5号。

人口問題研究会編 1935「マルサス没後百年記念人口問題資料展覧会写真集」『人口問題資料』刀江書院、第7輯。

南亮三郎、館稔編 1966『マルサスと現代：マルサス生誕二〇〇年記念』(人口学研究会研究叢書4)勁草書房。

東京統計協会 1916『統計集誌』第420号、74~75頁。

京都法學會 1916『京都法學會雑誌』第11巻第3号、160頁。